

今、

教育において最も重要な課題は、「コミュニケーション」の場をいかに造っていかよということなのではないだろうか。これは、子どもたちに対してだけでなく、実は大人たちに対しても同じである。この「コミュニケーション」は「やりとり」と置き換えてもよいかもれない。つまり、話の中で相手の気持ちをどう受け取るか、自分を、または自分の気持ちをどう表現し、他人にどう伝えてゆくか。先に言ってしまうが、美術にはそうしたやりとりを活性化する力があるし、コミュニケーションの内容を深める力がある。最近の子どもたちをめぐる様々な事件や出来事は、「ついに起きてしまった」と誰もが思えるほど、今の世の中の深刻な心の痛み具合を反映している。家族の間でさえコミュニケーションがとれないケースも増え、この現代社会では、人とのぬくもりや触れあいを持つ関係が希薄になり、そうした関係をつくる機会すら奪われてしまっている。

そこに浮かび上がってくるのは、「コミュニケーション」の不在である。考えてみると、私たちの生活から、日常的にあった沢山のやりとりが人員削減や合理化による機械化などによって随分と減ってしまった。わずかこの一〇年くらいの間にごく普通のコミュニケーションの場が剥奪されてしまったような気が

教育における美術館の新しい役割

——コミュニケーションの可能性——

降旗千賀子

目黒区美術館学芸員

してならない。いろいろな会話が次々にマニアル化されるようになってきた。本来の様々なやりとりは、声だけでなく実手から手へ、表情と表情の微妙な仕草や動作のやりとりがとも重要であったのだ。私達は、そこから人の感情の起伏や些細な表情を学んでいたような気がする。こういうことが最近と

も気になるのは、私が目黒区美術館で教育普及活動に関わって約一〇年、美術を媒介にしたコミュニケーションを常に意識し、市民参加の事業に、五感を微妙に刺激しあう創造的

な体験活動を開催している中で、気がつかされてきたことがあるからだ。
目黒区美術館では、開館以来「手と目の冒險広場」という、展覧会とワークショップ（創造的体験活動）を組み合わせた企画を開催している。この企画では、対象を子どもから大人まで、幅広い年齢層の人たちに設定しているのが一つの特徴となっている。テーマは子ども、大人を通して興味が持てる事柄をトピックに選んでいる。例えばここ数年シリーズで続けている企画に「色の博物誌―青（一九九二）、赤（一九九四）、白と黒（一九九八）」がある。この主旨は、「色は、昔どんな物から造っていて、その色にはどんな文化があったのか」を考古、民俗、美術を横断して検証するというものである。こうした内容は、子どもにとっても大人にとっても興味を持って、それぞれの年齢にあわせて楽しめるのである。この企画に伴って同時に開催するワークショップでは、子どもから大人まで参加できるコースを中心に組み立てていく。というのも、以前は小・中学生を対象とした子どものコース、高校生以上を対象とした大人のコースとして別々に行っていたのだが、数年前より始めた異年齢の人々が一緒に集まれるコースの方がコミュニケーションに幅が出て教育的効果が大きいことがわかってきたことによる。

地域こども文化プラン

小学二年生以下だけはやはり別のコースになるが、三年生以上は大人と同じコースとして設定するのである。これは親子ということではなく、他人同士の子どもと大人が集まるということである。

実際、小学生から中・高校生（数は少ないが）、大学生から大人——上は七〇歳くらいまでの年齢の開きの中で展開してゆく。大抵のコースは三〜四日間、一〇時三〇分〜一六時三〇分、かなり長めの時間を共有し、あるテーマに沿って、作品を造ったり、表現する過程で、イメージの交換をしたり、意見を述べ合ったり、聞いたり、様々なコミュニケーションの形を取り入れてゆく。こうした過程を経ることで、大人や子どもという枠を超えた不思議なコミュニケーションが成立し、講師やスタッフを含めてすべての参加者たちが対等になれるのである。時には小学校三年生が大人に教えたり、彼らと大人が対等に話し合っていたりする場面が見られる。不思議な、と形容したのは、そうした風景が普段、学校、社会、家庭の中では見られない、新鮮で温かいものであるからだ。

こうした異年齢の人々が集まるワークショップでは、当然大人の最初の反応は、「あら、このコースは子どもと一緒になの？」という、子どもが一緒に参加していることに違和感を

感じるものが多い。しかし、終了後のアンケートでは、「子どもや異年齢の人たちと一緒に参加できて、人にはいろいろな見方があることがわかった」「子どもの創造力のたくましさや考え方の柔軟さに驚いた」などの感想が多く聞かれる。一方、参加した子どもの親たちのアンケートからも「知らない大人の人と友達になれてうれしそうだった」「大人と一緒に扱ってもらえ、何か自分が認められたというところを感じて生き生きしていました」という感想も返ってくる。こういう感想が物語っていることは、普段の生活パターンの中では出会わない人との出会いによる新鮮な体験、つまり新鮮なコミュニケーションを各々が感じ、美術体験をよりレベルアップした成果としてとらえているということである。ここで私が強調したいのは、異年齢同士の間、大人と子どもの会話は、対等な人間と人間の会話が成り立ち、それによって、それぞれの考え方や見方に大きな展開が期待できることなのである。

私たち大人は「子どもはこうである」とイメージを造りすぎてはいないだろうか。社会の中では、子どもと大人の境界ははっきりと分けられ、大人は子どもを子どもとして扱い、子どもには大人を大人として見ることを強要している。先の異年齢の人たちを対象とした

ワークショップを重ねるごとに、そうした現代社会で決められた枠についての疑問を強く感じるのである。特に現代は、個々人の生活サイクルにおいて、コミュニケーションをかわす相手が決まっている。だから、大人、学生、子どもたちが、縦横に会話をする機会が持たなくなっていること自体が、最初に述べたコミュニケーションの場がなくなっていることと同様に問題なのである。

先にも述べたが、美術にはコミュニケーションを活性化させる力があるし、深化させる力もある。美術、芸術、人が生み出した表現を鑑賞したり、自分を表現し創造する。そしてそれを共有する。それが美術館の教育普及活動で行われる様々な活動、ギャラリートップ、ワークショップ、講座、ガイドブックの活用の実践なのである。

ようやく日本の美術館でもこうした教育普及活動が活発に行われるようになってきた。これから先は、従来の美術館の機能——収集、調査、研究、展示——だけでなく、それに加わるもう一つの大きな機能としての美術の教育普及に、人間教育のいかに美術が有効に働くかを実践する創造的な生涯教育があるのである。美術館はそうしたコミュニケーションを育む場としての可能性をもっている。それを予感し、期待したい。